

# 北大竹遺跡における祭祀関連遺構の再検討 —出土遺物時期の整理—

渡邊 理伊知

**要旨** 北大竹遺跡において確認された3ヶ所の遺物集中（祭祀関連遺構）はそれぞれ中心となる時期が異なるが、遺物の出土様相も異なっている。その違いは各遺物集中で性格の違いが表れた結果によると想定できる。また、未だ北大竹遺跡においてどのような形で、何を目的とした祭祀行為が執り行われていたかの回答も示せていない。

その課題に取り組むためには、出土した膨大な量の遺物を検討する必要があることから、本稿ではまず、遺物の年代を改めて見直し、各遺物集中が機能していた時期の再確認を行った。

その結果、各遺物集中の時期幅を捉えることができた。また、時期によっての遺物器種の増減や変化を確認できた。この成果を元に今後、北大竹遺跡に執り行われた祭祀の一端を明らかにしたい。

## はじめに

令和4年（2022）3月に北大竹遺跡第18次調査の発掘調査報告書を刊行した（埤埤文編2022）。筆者はその後、いくつかの媒体を通じ、北大竹遺跡の概要や性格について述べたことがある（渡邊2022・2023a・2023b・2024）。

しかし、祭祀関連遺構とみられる第2号遺物集中と第1号遺物集中・第3号遺物集中において遺物出土の状況が異なる点やどのような形で、何を目的とした祭祀行為が執り行われていたかの回答を示せていない。

北大竹遺跡において確認された3ヶ所の遺物集中（祭祀関連遺構）はそれぞれ中心となる時期が異なるが、遺物の出土様相も異なっている。その違いは各遺物集中で性格の違いが表れた結果によると想定できる。確認された遺物の出土状況は後世に人為的、あるいは自然現象によって攪拌された可能性もあり得るが、執り行われた祭祀行為の最終的な形をほぼ現代に残した状態である。すなわち、当時どのような祭祀行為が執り行われたかを復元するためには最終的な状態から祭祀行為

が行われた段階や準備段階へと遡って検討を行う必要がある。

北大竹遺跡において執り行われていた祭祀行為の復元という課題に取り組むためには、出土した膨大な量の遺物を検討する必要がある。それを踏まえた上で、同時代の他の祭祀遺跡との比較や当該地域の周辺遺跡や古墳との関わり、地理的環境の復元、祭祀や儀礼を記した古記録による検討を行わなければならない。

分析方法としては、まず、各遺物集中から出土した遺物の年代を再確認し、遺物集中の年代幅を捉えなおす。その後、その年代幅と出土状況から各遺物集中にそれらの遺物が持ち込まれたタイミングや順番、共伴性を明らかにし、それぞれの遺物集中の性格を検討する。また、それぞれの遺物集中の遺物出土状況が異なる意味について、検討する必要がある。

本稿では、この前提作業の初手として遺物年代の整理を行う。

なお、「遺物集中」という呼称については、発掘調査時点から付けている名称である。理由は、

最初に確認した第1号遺物集中①は須恵器の甕が並び、その周辺から須恵器坏Gのセットや土師器暗文坏や甕、子持勾玉や石製模造品が分布するような出土状況であり、決して「集積」と呼べるような積んだ状態ではなかったことによる。

仮に第2号遺物集中とした地点が最初に確認されていたら「遺物集積」や「土器集積」と呼んでいた可能性もある。

この点はまさに第2号遺物集中と第1号遺物集中・第3号遺物集中において遺物出土の状況が異なる理由はなぜかという点にも直結することから最初に触れておく。また「遺物集中」の名称理由については別稿（渡邊 2024）の「註1」でも触れている。

発掘調査及び整理作業の過程で遺物集中はいずれも祭祀に関連した遺構であると結論付けたが、遺構名称としては、客観的に出土した状態を端的に示す遺物集中という名称を用いている（註1）。

## 1 北大竹遺跡の概要

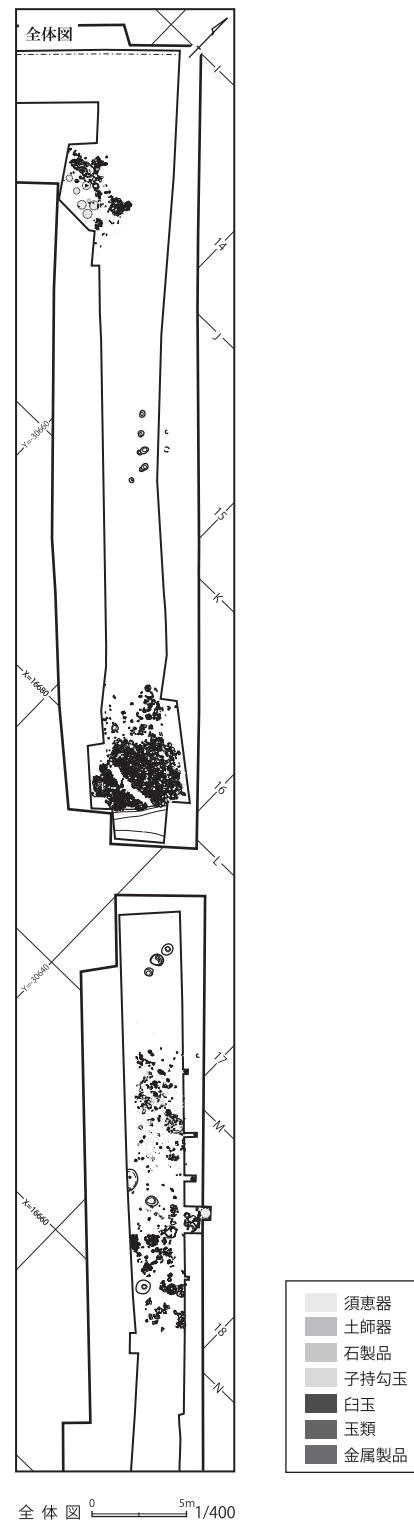
北大竹遺跡の第18次調査の調査成果については、『発掘調査報告書』の他に『季刊考古学』第161号（渡邊 2022）などでまとめているので、ここでは大まかな概要と各遺物集中の概要についてとりあげる。

### （1）遺跡の概要

行田市若小玉・藤原町に所在する北大竹遺跡の第18次調査はA区・B区・C区の3地点で発掘調査が行われており、いずれもこれまでの調査地点よりも北側に位置する。

周辺には、6世紀中頃から造営が開始された若小玉古墳群が所在し、約2.5km南へ向かった地点に特別史跡埼玉古墳群が位置している。遺跡の北側約5km地点には利根川が東流している。

3カ所の遺物集中が確認されたのはB区北西側である（第1図）。A区、B区中央部から南東側、C区では、6世紀中頃から9世紀後半にかけての



第1図 遺物集中全体図

集落が確認された。

次に遺物集中を時期の古い順に出土した遺物を中心にとりあげる。

## (2) 第2号遺物集中の概要 (第2図)

第2号遺物集中は第18次調査において確認された3ヶ所の遺物集中の中でも古い時期の遺物が多く確認された。出土状況も多種多様な遺物が雑然と置かれており、須恵器の甕が並んで配置されていた第1号遺跡集中や第3号遺物集中とは様相が大きく異なる。

須恵器は、横瓶・提瓶・高坏形器台・脚付(台付)長頸壺・壺・無蓋高坏・有蓋高坏・甕・坏蓋・坏身といった多彩な器種が出土している。産地は北関東(埼玉県・群馬県)の製品の他に畿内からの搬入品とみられる製品(陶邑系)がみられる。

土師器は、坏・碗類が最も多く報告書掲載点数で446点出土している。ほかに高坏が25点、甕類が52点、その他の器種が18点出土し、甑は一切出土していない。

石製品は、子持勾玉が19点、石製模造品、白玉が845点出土した。また、石製品ではないが琥珀製の勾玉やガラス玉も含めた玉製品が出土している。

金属製品は、鉄鏃が非掲載を含めて405点、鉄製模造品が非掲載を含めて272点と他に比べて突出している。その他の金属製品としては単鳳環頭大刀の柄頭、鉄鉾2点、鉄地金銅張三葉文楕円形杏葉と杏葉か鏡板といった馬具などの威信財が出土している。

## (3) 第3号遺物集中の概要 (第3図)

次段階にあたる第3号遺物集中では、須恵器甕は大甕と呼べる大型品が多く出土している。産地は全て埼玉県を含む北関東の製品とみられる。須恵器甕以外の器種は須恵器、土師器共に出土量は減少する。須恵器は報告書掲載資料が17点で甕が11点、甕が1点、小型の壺が3点、平瓶が1点、提瓶が1点である。土師器は坏が19点、甕

が23点である。

石製品は、子持勾玉が11点出土し、石製模造品は勾玉形が9点、剣形が9点、有孔円板が19点、器種不明品が17点出土している。白玉の出土量は36点で第2号遺物集中から大きく減少している。

金属製品は、鉄鏃が非掲載を含めて44点、石突が7点、大刀が2点、模造品が非掲載を含めて39点、刀子が1点などである。第2号遺物集中と比べて減少しているが、後述する第1号遺物集中①と比べると充実している。

## (4) 第1号遺物集中の概要 (第4図)

第1号遺物集中は、南東部と北西部で遺物の出土様相に違いが認められ、異なる性格を有していた可能性があることから、南東部の第1号遺物集中①と北西部の第1号遺物集中②に細分されている。但し、区分は遺物量が希薄になった地点を任意に南北線で区切ったものである。

### 第1号遺物集中①

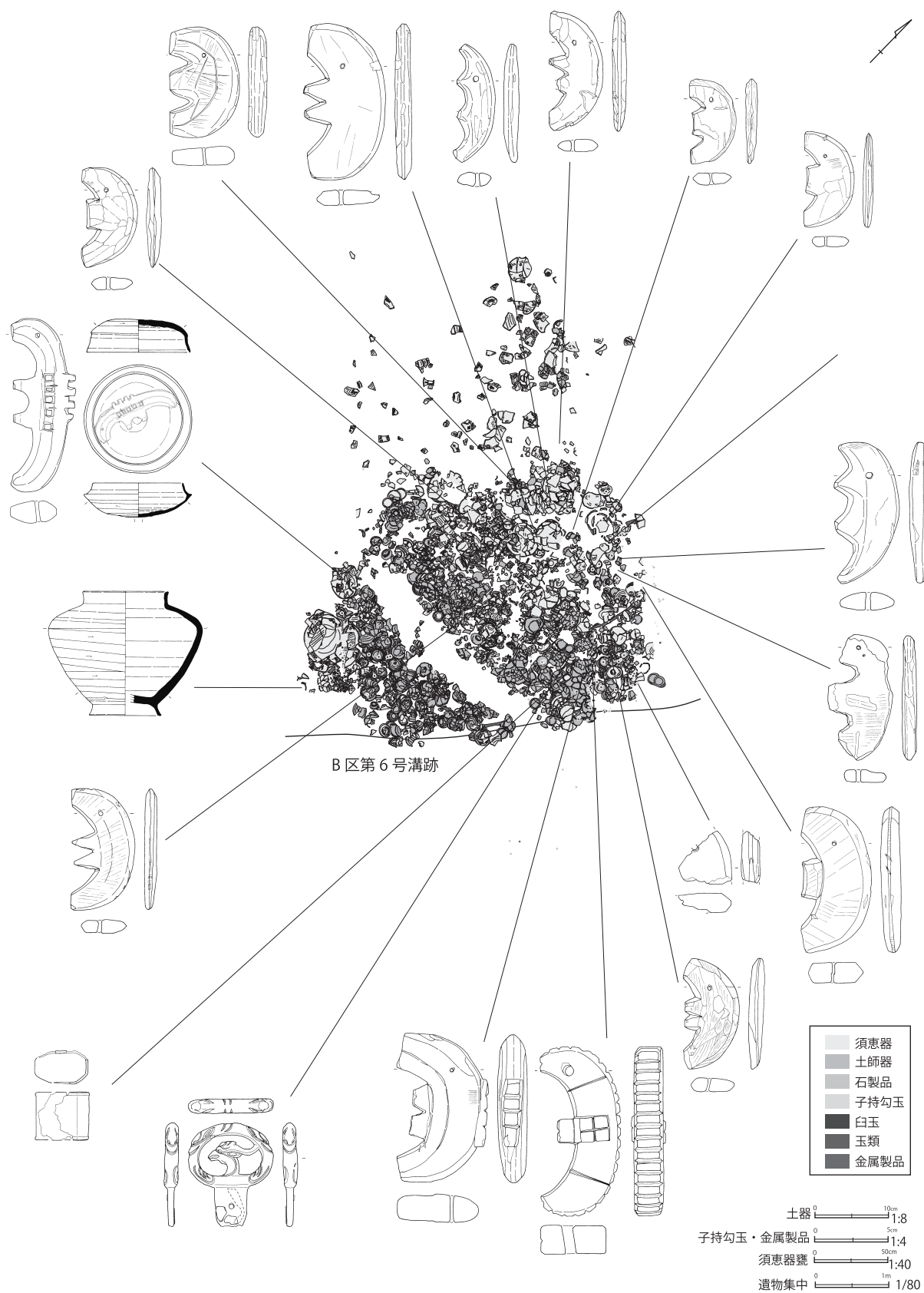
第1号遺物集中①は第3号遺物集中と同様に須恵器甕が並んで出土しているが第3号遺物集中ほどの大型品はない。須恵器甕は9点出土している。産地は北関東の製品とともに東海地方の製品がみられる。

第3号遺物集中と同様に甕以外の器種は少ないが、須恵器の坏Gが身と蓋が5セット、土師器の暗文坏といった特徴的な遺物が出土している。

石製品は子持勾玉が7点、石製模造品は有孔円板や剣形模造品とともに、斧形とみられる石製模造品が出土している(渡邊2024)。このタイプの石製模造品は第2号遺物集中や第3号遺物集中及び第1号遺物集中②からは出土しておらず、第1号遺物集中①の特徴の一つといえる。また、白玉は4点とほぼ出土していない。

金属製品は紡錘車及び円盤が須恵器甕の内部から出土し、そのうちの紡錘車の方は石製模造品の有孔円板と一緒に甕に納めされていた。第2号遺

## 第2号遺物集中



第2図 第2号遺物集中遺物出土地点



物集中から大量に出土している鉄鏃や鉄製模造品は混入品とみられる欠損した模造品が1点出土しているのみで激減している。

第1号遺物集中①は、須恵器甕は並ぶという出土状況の類似性から第3号遺物集中に後続する同様の性格を有していた可能性が高いと想定する。

## 第1号遺物集中②

第1号遺物集中②は第1号遺物集中①の北西側に位置する。第1号遺物集中①とは異なり、須恵器甕が並ぶ状態ではなく、全体的に土器は破片が多い。しかし、ほぼ完形のフラスコ形長頸壺や白玉38個を敷き詰めその上に子持勾玉が置かれた状態の土師器坏が出土するなど特徴的な出土事例も確認されている。

石製品は子持勾玉が5点、有孔円板が14点、器種不明品が11点出土している。第1号遺物集中①で出土した斧形とみられる石製模造品は出土

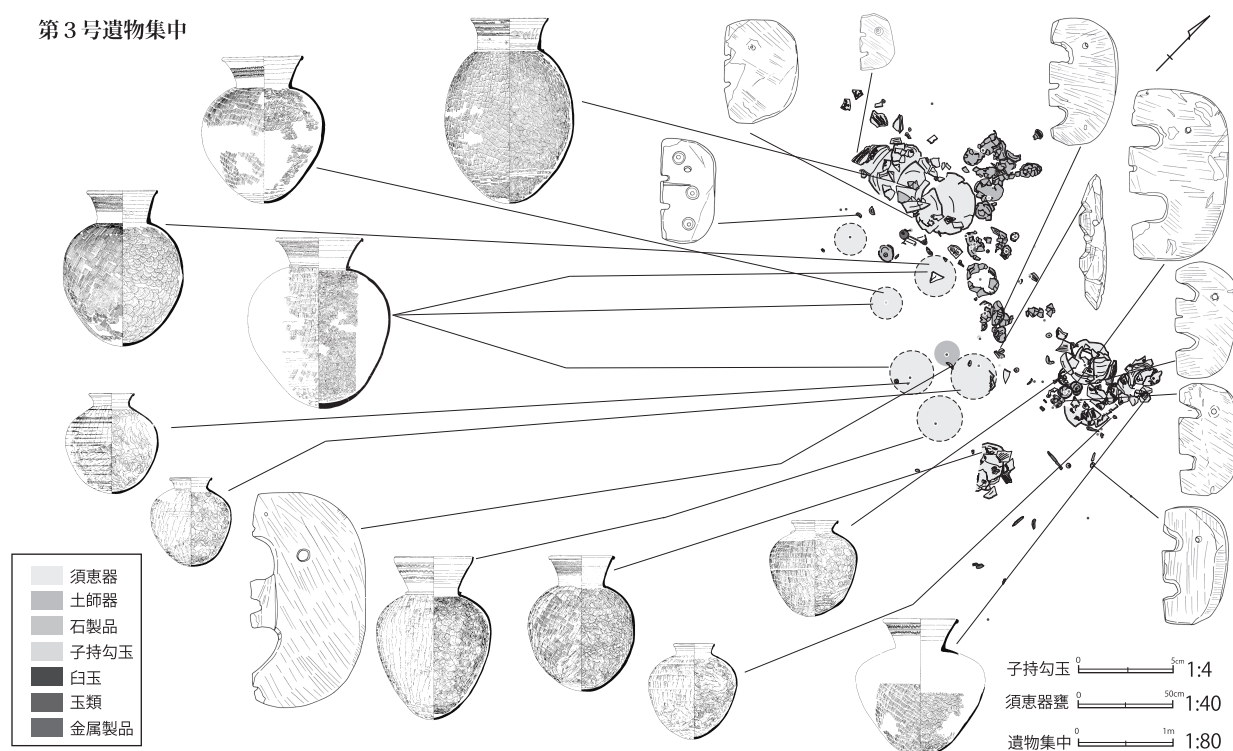
していない。また、子持勾玉も古い様相を残すタイプである。白玉は532点出土している。

金属製品は鉄鏃が6点、鉄刀が1点、円盤が1点、器種不明品が1点出土している（註2）。また、小型海獣葡萄鏡が出土している点も特筆される。第1号遺物集中①と隣接しているが、遺物の出土状況は明らかに異なる様相を示している。

## 2 遺物集中出土土器の年代観

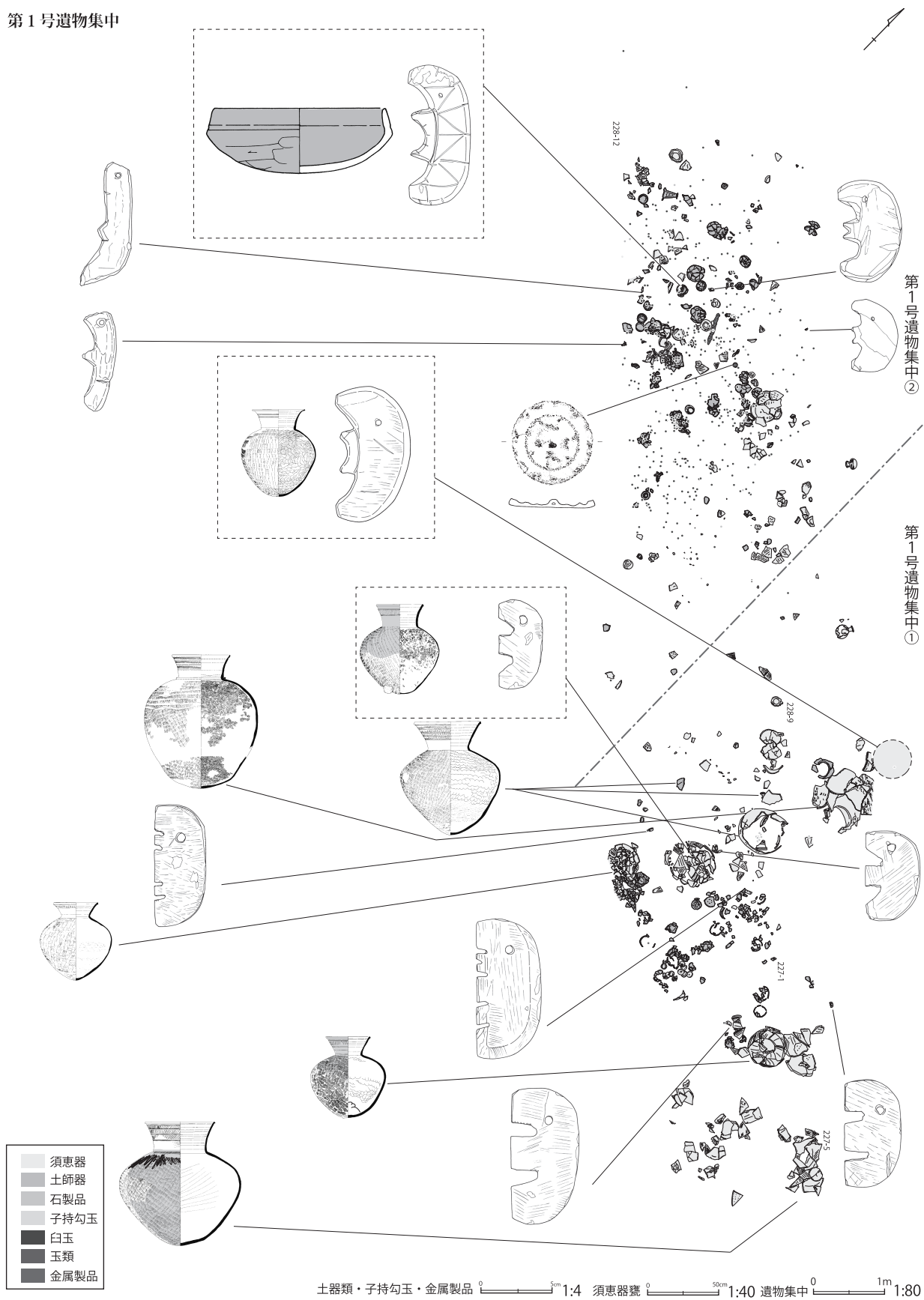
各遺物集中が機能していた時期幅を絞り込むために土器類の年代観を整理する。

なお、ベースとなる時期区分は『発掘調査報告書』の「調査のまとめ」において、須恵器及び子持勾玉の時期区分を行ったⅠ期～Ⅴ期の時期区分を軸とする。他の時期区分研究との混同を避けるため、便宜上、北大竹Ⅰ期～北大竹Ⅴ期と表記する。また、須恵器や子持勾玉では設定できなかった



第3図 第3号遺物集中遺物出土地点

第1号遺物集中



第4図 第1号遺物集中遺物出土地点図

た前後の時期に対応させるため、0期とⅥ期を設定する。陶邑編年(田辺 1981)及び飛鳥編年(奈文研編 2017)との対応関係は、

北大竹0期 [TK10 (古) 型式]

北大竹Ⅰ期 [TK10 (新) 型式]

北大竹Ⅱ期 [TK43 型式]

北大竹Ⅲ期 [TK209 型式]

北大竹Ⅳ期 [飛鳥Ⅰ期]

北大竹Ⅴ期 [飛鳥Ⅱ期]

北大竹Ⅵ期 [飛鳥Ⅲ期以降]

を基本軸とする。

### (1) 第2号遺物集中の土器

まず、最も古い土器類を伴うとされている第2号遺物集中の時期幅と時期ごとの遺物量の推移を確認する。

#### 須恵器

須恵器については、『発掘調査報告書』の「調査のまとめ」で取り上げているが、改めて取り上げる。

北大竹Ⅰ期の坏蓋は、口縁端部が「ハ」の字状に広がる北関東型須恵器のタイプが現れ、天井部の稜も残り、坏身は口縁部の立ち上がりが後続する段階より長く、垂直気味に立ち上がる。高坏も坏身同様の口縁部を有する。脚端部は屈曲している。有蓋高坏には二段三方透かしと三段交互透かしのタイプがみられ、無蓋高坏には一段三方透かしがみられた。

甕は頸部が太く長頸化が進んでいない。脚付甕も頸部が太く、頸部の施文が2段で脚部も高いことから、この段階か次段階と思われる。

北大竹Ⅰ期は陶邑編年 TK10 (新) 型式とした。

北大竹Ⅱ期の坏蓋、坏身は口径が大きくなり、身の深さが浅くなる。口縁部は内傾化し短くなる。高坏は長脚化が進み、脚端部は折れずに端部に面を持つ。

甕は頸部が細くなり長頸化が進行している。頸部の施文は3段のものが主流となっている。

脚付長頸壺及び台付長形壺は北関東系の窯跡で生産された器種と陶邑系で生産された器種において製作の技法が異なるため、北関東系の器種を脚付長頸壺、陶邑系の器種を台付長形壺と分けしている(註3)。

藤野一之氏によると脚付長頸壺はこの段階に出現し、短期間で消滅する器種としている。(藤野 2019) しかし、台付長頸壺は頸部の長頸化や脚部の変化からある程度の変遷があることから脚付長頸壺の変遷も想定されよう。北大竹Ⅱ期は陶邑編年 TK43 型式並行期とした。

北大竹Ⅲ期は坏蓋の口径が縮小化し、稜は不鮮明となる。北大竹Ⅰ期や北大竹Ⅱ期と比べて量が減少している可能性がある。北大竹Ⅲ期は陶邑編年 TK209 型式並行期とした。

第2号遺物集中は、北大竹Ⅰ期～北大竹Ⅲ期の須恵器が主に出土している。量的には北大竹Ⅱ期がピークで北大竹Ⅲ期には量が減少している。

北大竹Ⅳ期以降の須恵器は、第5図74の有蓋短頸壺が出土している。器形から7世紀後半～8世紀代に位置付けられ、他の遺物と比べて新しい時期となる。出土状況としては、周囲の遺物群とほぼ同一の標高値で一緒にまとまって出土しているため、後世に混入していた可能性は低い。

#### 土師器

第2号遺物集中から出土した土師器は坏類・高坏・長胴甕・球胴甕などがある。この中で最も出土量が多く、型式変遷が追える坏類を取り扱う。

坏類の出土数及び出土比率は、報告書掲載資料で点数が446点である。比率は蓋模倣坏が53%、身模倣坏が23%、有段口縁坏が14%、比企型坏が5%、その他の坏が3%、小針型坏に類似する坏が2%である。

行田市内の遺跡としては、野に所在する築道下遺跡の『発掘調査報告書』において剣持和夫氏が土師器の時期変遷研究を行っている(埴埋文編 2000)。また、田中広明氏は有段口縁坏を定義

付け（田中 1991）、水口由紀子氏は比企型坏の検討を行っている（水口 1989）。

ここでは、これら先学の研究成果を参考に土器類の年代観を検討する（註 4）。

#### 〈蓋模倣坏〉

当該地域周辺の土師器坏は須恵器蓋を模倣したタイプが広がる。模倣坏については後述する身模倣坏も含め築道下編年を参考とする（埤埤文編 2000）。口縁部が垂直気味に立ち上がり身の深いタイプが、口縁部が外反しつつ口径が広がり、身が扁平になっていく。

築道下編年と本稿の時期区分との対応関係は以下の通りとなる。

築道下Ⅲ期           ⇔北大竹 0 期

築道下Ⅳ期           ⇔北大竹 Ⅰ 期

築道下Ⅴ期・Ⅵ期⇔北大竹 Ⅱ 期

築道下Ⅶ期・Ⅷ期⇔北大竹 Ⅲ 期

築道下Ⅸ期・Ⅹ期⇔北大竹 Ⅳ 期

築道下Ⅺ（古）期⇔北大竹 Ⅴ 期

築道下Ⅺ（新）期～⇔北大竹 Ⅵ 期

に位置付けられる。

また、少量であるが、築道下Ⅲ期に位置付けられる可能性がある土師器坏が出土しており、報告書で区分した須恵器では位置付けられなかった時期区分となるため、北大竹 0 期として新たに設定できる可能性があるが、出土量が極めて少ないため、検討を要する。

#### 〈身模倣坏〉

身模倣坏は須恵器身を模倣したタイプであり、東関東を中心に広がるが、当該地域でも出土している。口縁部がやや長く、傾きが緩く垂直気味のものが、口縁部が短くなり傾きが強くなる。口径が大きくなり身が扁平化していく。

築道下編年と本稿の時期区分との対応関係は蓋模倣坏と同様である。

#### 〈有段口縁坏〉

有段口縁坏は、口縁部に複数の段が作られ、多

くの製品が黒色処理されるという特徴を有する坏である。

田中広明氏は有段口縁坏を 5 段階区分している。陶邑編年との対応関係としては、Ⅰ段階は TK10 型式～TK43 型式、Ⅱ段階は TK43 型式～TK209 型式、Ⅲ段階は TK43 型式～TK217 型式、Ⅳ段階は TK209 型式～TK46 型式、Ⅴ段階は関東地方で大規模な須恵器生産が展開する 7 世紀末から 8 世紀初頭としている（田中 1991）。

第 2 号遺物集中から出土した有段口縁坏は、多くがⅠ期かⅡ期に帰属し、一部、Ⅲ期に含まれそのような個体がある。

#### 〈比企型坏〉

比企型坏は口縁部が屈曲し、口縁部及び内面に赤彩を施されることが多い「赤」を基調とする土師器坏である。

水口由紀子氏は比企型坏を大別 4 段階に区分し、Ⅰ段階を小別 3 期、Ⅲ段階を小別 3 期、Ⅳ段階を小別 2 期に区分している（水口 1989）。

第 2 号遺物集中から出土した比企型坏は、大部分が口径 13cm 強～14cm で器高が低く、全てⅢ段階のⅠ期かⅡ期に位置付けられるとみられる。

水口氏はこの段階を陶邑編年に充てるとⅢ段階 1 期は TK43 型式、Ⅲ段階 2 期は TK43 型式・TK209 型式・TK217 古段階型式にしている。

本稿での時期区分に充てると、Ⅲ段階 1 期が北大竹 Ⅱ 期、Ⅲ段階 2 期が北大竹 Ⅱ 期から北大竹 Ⅲ 期に収まるとみられよう。

#### 〈小針型坏・小針系坏〉

小針型・小針系については近年、山田琴子氏が検討を行い、白色で堅致な胎土を有する小針型ではない小針‘系’などと呼ばれるタイプを蓋模倣坏と区分するため口径 14cm 以上のものを小針‘系’としている（山田 2021）。

また、熊谷晋祐氏は「口径は原則 15cm 以上、口縁部と底部は稜をもって計画に区分される、口縁部は外反するもので、外傾は含めない」土器を



「大型外反口縁坏」と位置付け、小針型坏をその系統の一つとし、「大型外反口縁坏のうち、胎土が精選され、焼成が堅緻であり、色調は白色系のもの」とし、また、焼成や色合いが異なるタイプであるいわゆる小針‘系’などと呼ばれるタイプも「大型外反口縁坏」の系統の一つに含めている(熊谷 2017)。

この基準に照らして、第2号遺物集中出土の土師器坏をみると、蓋模倣坏としたタイプの大半が小針‘系’となるが、本稿では報告書での分類による(註5)。

#### 〈第2号遺物集中の土師器坏〉

詳細な点数は挙げないが、最も出土量が多い蓋模倣坏を中心にみると、蓋模倣坏は北大竹Ⅰ期から一定量あり、型式に対する比率では過半数近くある。また、その前段階(北大竹Ⅰ期)からみられる可能性もある。

北大竹Ⅱ期になると蓋模倣坏の比率割合はピークとなり7割に達する。土師器坏全体の量としてもⅡ期が最も多いとみられる。その後の土師器坏はⅢ期になると減少し、Ⅳ期には10点程度みられる程度となり終了する。

### (2) 第3号遺物集中の土器

第3号遺物集中の土器は前述の通り、報告書掲載資料で須恵器は甕11点、甕1点、小型壺3点、平瓶1点、提瓶1点である。土師器は坏19点、甕23点である。

#### 須恵器

須恵器の出土量は甕が最も多く、その他も甕、壺、瓶類であり、坏類の出土はない。

年代比定の資料として、甕は頸部から口縁部にかけて欠損しているが底部の扁平化せず、7世紀代には下らない。

平瓶は湖西窯産とみられるが、頸部は短く、傾斜角度は緩い。肩部はやや張るがそこまで強くない。天井部に珠文が2ヶ所みられる。遠江編年のⅣ期前頃か(鈴木 2001)。

甕はいずれも関東地方の製品と見られる。大型品と中型品とサイズによって分類できる。

北大竹Ⅲ期を中心としたに時期に収まるとみられる。

#### 土師器

土師器坏は19点出土し、型式別の点数は蓋模倣坏が7点、身模倣坏が1点、有段口縁坏が7点、比企型坏が4点である。いずれも小型化が進んでいる。北大竹Ⅳ期に位置付けられる。

### (3) 第1号遺物集中①の土器

第1号遺物集中①出土の土器類は多くない。

#### 須恵器

報告書掲載点数は、坏Gの蓋と身が5セット、猿投窯産のフラスコ形長頸壺が2点、形を復元できる甕が8点である。残存状態が良い須恵器はほぼ全て掲載されている。

甕は東海系と北関東系の製品がみられる。そのなかで東海系とみられる甕は5点ある(註6)。

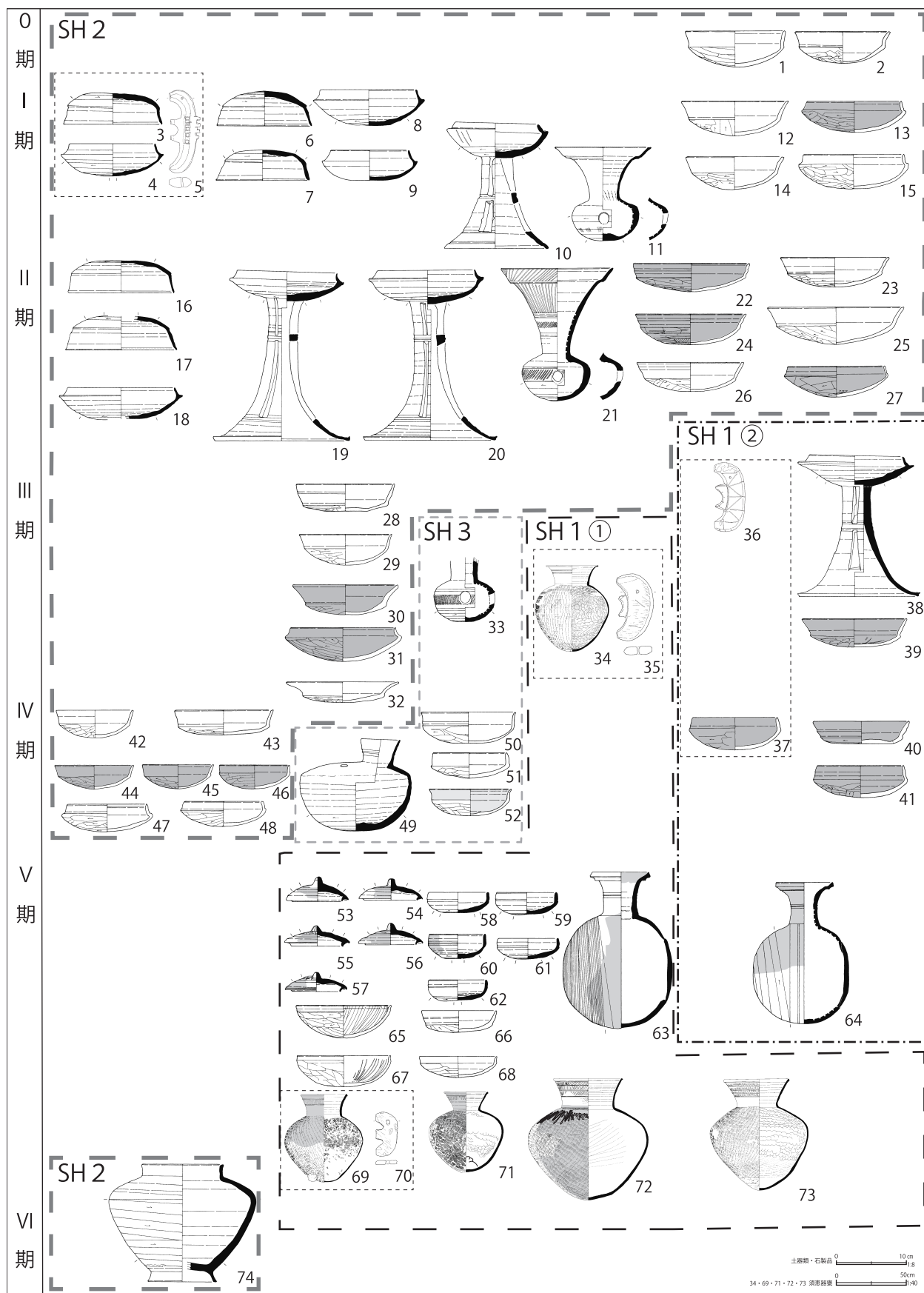
これらの特徴を記す前に関東地方へ多く流通しているとされる猿投窯跡製品と湖西窯跡産製品の特長について触れる。

猿投窯跡産須恵器と湖西窯跡産須恵器の胎土の特徴は、多くの研究者によって観察、研究されており、鶴間正昭氏がまとめている(鶴間 2019)。

それによると、猿投窯跡産須恵器の胎土の特徴としては、「砂っぽい胎土」、「黒色粒」、「赤みの黒灰色・黄灰色・赤黒色・赤褐色・暗灰色」、一方、湖西窯跡産須恵器の胎土の特徴としては、「緻密な胎土」、「含有物は少ない」、「灰色・明青灰色・白灰～明灰色、断面が白灰～明赤褐色」である。

藤野一之氏は猿投窯跡(東山窯跡)産須恵器甕の特徴を「胴部外面に平行叩きの後にラセン状の凹線文を巡らせる点である。(中略)また6世紀以降、同心円文の当て具痕は認められない。」としている(藤野 2019)。

7世紀代の湖西窯跡産須恵器甕の特徴は口縁部下の突線や突帯とされる。アテ具痕は無文と薄い



第5図 土器類変遷図

波状文がみられる（後藤 2015）。

第5図69の須恵器甕は胎土に「黒色粒」を含むが内面に緻密な同心円状のアテ具痕がみられる。北大竹遺跡第18次出土の東海系とみられる須恵器甕にラセン状の凹線文を巡らせるものは認められない。また、湖西窯跡産の特徴とされる突線や突帯が認められるものがあることから東海系とみられる須恵器は猿投窯跡産ではなく、湖西窯跡産と推定した。須恵器の大半は北大竹Ⅴ期に収まるとみられる。

### 土師器

土師器は坏が10点で2点は暗文坏、1点は北武蔵型坏、2点是有段口縁坏である。残りは模倣坏である。他の器種は小型壺が2点、大型壺が1点、甕が16点である。

遺物集中において、暗文坏及び北武蔵型坏は第1号遺物集中①からしか出土していない。北大竹Ⅴ期に位置付けられる。

### （4）第1号遺物集中②の土器

第1号遺物集中②の土器は時期幅が認められる。

### 須恵器

出土した主な器種は、高坏の蓋が3点、有蓋高坏が2点、小型の壺が4点、フラスコ形長頸壺が1点、横瓶が1点などである。

有蓋高坏は二段二方透かしと二段三方透かしのものがある。二段三方透かしの高坏は第2号遺物集中で出土しているものと同タイプで、北大竹Ⅱ期に位置付けられる。二段二方透かしの高坏は第2号遺物集中では出土していない。関東ではTK209型式に表れるとされ、北大竹Ⅲ期に位置付けられる。フラスコ形長頸壺は猿投窯跡産で第1号遺物集中①から出土したものと類似する北大竹Ⅴ期に位置付けられる。

### 土師器

土師器の報告書掲載点数は、坏が蓋模倣坏2点、身模倣坏20点、有段口縁坏15点である。比企

型坏や小針系坏は出土していない。

模倣坏、有段口縁坏のいずれも小型化が進行し、口縁部の開きが弱い。大半が北大竹Ⅳ期に位置付けられるが、一部、北大竹Ⅲ期に上がるものも含まれる。

## 3 子持勾玉・石製品・金属製品の年代観

次に土器類以外の遺物について時期差が認められる資料として子持勾玉、石製品、金属製品をとりあげる。

### （1）子持勾玉

子持勾玉の時期変遷は『発掘調査報告書』でまとめているが、概要を改めて述べる。

子持勾玉の形態の変化は、①断面形が楕円形から扁平に変わる。②古いタイプは背面子勾玉の表現が認められるが、それが省かれた後、背面に稜が施され、その後、稜もなくなる。③古いタイプは親勾玉と子勾玉の境に段が有るが、その後、段がなくなるが、親勾玉と腹部子勾玉で厚さが異なるが、最終的には親勾玉と腹部子勾玉が同じ厚さとなる。④成形・整形方法が刀子ケズリから砥石によるミガキ仕上げに変わる点から捉えることができる。

また、北大竹遺跡第18次調査において出土した子持勾玉には土器の内部から出土した資料が5点認められ、この土器と子持勾玉の5つのセットは、製作された時期が異なるとしても、子持勾玉が土器内に納められた時期は確実に同時併存していたといえる同時代資料であり、この5つのセットは土器の年代から時期を抑えることが可能な定点資料である（第6図3・7・27・35・45）。

以上の点を踏まえ、土器とセットの子持勾玉を定点資料として子持勾玉を形態の変化ごとの配列したものが第6図である。この変遷図を元に遺物集中ごとの子持勾玉についてみる（註7）。

### 第2号遺物集中

子持勾玉が19点出土している。主な出土状況

としては、第6図3の子持勾玉が蓋の閉じた須恵器坏の内部から出土したもので、土器内部から出土した5つのセットの一つである。

この須恵器坏はTK10（新）型式に位置付けられ、北大竹Ⅰ期となる。土器内から出土した子持勾玉の中では最も古い段階に位置付けられる。

この第6図3の子持勾玉を含め、背面と側面に子勾玉表現を持つ子持勾玉は2点ある。

次に側面の子勾玉表現が廃され、背面子勾玉表現を「刻み」による表現を含め施されているものは前述の2点を除くと4点出土している。これらが次段階に位置付けられる。

これらの背面と側面に子勾玉表現がみられる子持勾玉は全て第2号遺物集中からの出土である。

第2号遺物集中から残りの16点は背面及び側面の表現は認められないが背面に稜がみられる。また、親勾玉と腹部子勾玉の間に段を有するタイプがある。第3号遺物集中や第1号遺物集中①みられるタイプは一部の例外を除きほとんどが背面の稜が廃され、親勾玉と腹部子勾玉の間の段も無くなることから、第2号遺物集中出土品の方が時期的に先行する。

第2号遺物集中内でも第6図1～5と8～23では、背面子勾玉や側面子勾玉の廃止といった画期があるとみられる。

なお、この段階の子持勾玉は腹部子勾玉が方形を主体とするもの（第6図8・16～19、21～23）と三角形を主体とするもの（第6図9～15）に分かれる。

### 第3号遺物集中

第3号遺物集中出土の子持勾玉は多くが背面の稜と親勾玉と腹部子勾玉の間の段も無くなるが、第6図28と24は様相が異なる。

第6図24は背面の稜は無いが、親勾玉と腹部子勾玉の間の段を有することから、ある種の過渡期的な様相を呈する。

28は『発掘調査報告書』の腹部子勾玉分類で

C1類とした「浅い台形が2つ」の腹部子勾玉を有する。C類は「台形が2つ」の体部で、C2類が「台形が2つで窪みが尖る」とした第6図1でC類は計2点のみである。第6図1が丁寧なつくるに対して第6図28のつくりが粗雑化しているため、第6図1の次段階に位置付けたが、もっと時期が下る可能性もあるだろう。

第6図27は土師器甕の内部から出土した。この土師器甕は口縁部が欠損しているが、胴部のケズリが斜め方向に行われる。7世紀初頭頃に位置付けられよう。

### 第1号遺物集中①

第1号遺物集中①から出土した子持勾玉は7点ある。ほとんどは断面形が扁平形を有し、砥石による研磨で成形・整形されている。また、背面や側面に子勾玉表現はみられず、親勾玉と腹部子勾玉の間もフラットとなり同じ厚さとなっている。第6図45は須恵器甕の内部から出土した子持勾玉で土器内部から出土した5つのセットの一つの中で最も新しい時期となる。子持勾玉全体の中でも製作の退化が著しく、終末に近い状況を示す。

第1号遺物集中①からはもう一点、土器内部から出土した子持勾玉がある。第6図35は須恵器甕の内部から出土した土器内部から出土した5つのセットの一つである。

但し、第1号遺物集中①から出土した他の子持勾玉よりも古い様相を示す。この子持勾玉は背面に稜がみられ、親勾玉と腹部子勾玉の間に段を有し、他の第1号遺物集中①出土の子持勾玉と比べて明らかに古手の様相を示す。

### 第1号遺物集中②

第1号遺物集中②から出土した子持勾玉は5点である。第1号遺物集中①から出土した扁平なタイプは無い。

第1号遺物集中②から出土した子持勾玉で特筆すべきものは第6図7の子持勾玉である。この





子持勾玉は土師器の身模倣坏に白玉 38 個を敷き詰めた上に置かれた状態で出土している。この身模倣坏は口縁部が欠損し外側へ倒れた状態で残存状態が極めて悪い状態であった。器形は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口径が縮小化している。6 世紀末から 7 世紀初頭頃の時期に位置付けられる。

子持勾玉自体は、背面に右側に 7 カ所、左側に 7 カ所の刻みで表現されているが、形骸化が著しい。とはいえ辛うじて表現を有する。側面子勾玉表現は鋸歯文で表現される。また、背面子勾玉の刻みの一部は側面の鋸歯文表現とつながる。

第 2 号遺物集中において出土した明瞭に背面や側面に子勾玉表現を有する子持勾玉よりは新しい様相を示すが、背面や側面に刻みや鋸歯文表現を有することから、それらが認められないタイプよりも古手の様相を示す。

第 3 号遺物集中から出土した第 6 図 27 の土師器甕の内部から出土した子持勾玉は 7 世紀初頭頃に位置付けられる点、第 3 号遺物集中が第 1 号遺物集中②よりも時期幅が短いとみられる点から、7 世紀初頭頃の子持勾玉は第 6 図 27 のように扁平化し、背面や側面の子勾玉表現は廃されたと想定できる。

このことから、第 6 図 7 の子持勾玉はこの坏よりも古い段階である可能性も想定でき、子持勾玉が、長期的に伝世した後に土師器坏に納められた可能性がある。

## 小結

以上、子持勾玉について取り上げたが、まず、第 2 号遺物集中では、背面や側面の子勾玉表現の有無で分けられ、時期的な画期があるとみられる。第 6 図 1～6 は、多少の幅がある可能性もあるが、北大竹Ⅰ期～Ⅱ期を中心とした時期に位置付けられる。

第 6 図 8～23 は他の遺物集中から出土した子持勾玉も含めた前後関係から北大竹Ⅲ期を中心と

する時期にあたるとみられる。また、この段階までは腹部子勾玉が方形を主体とするものと三角形を主体とするものに分かれる。

子持勾玉からみると第 2 号遺物集中は前半と後半に分かれるといえる。

次に第 3 号遺物集中については、大半は扁平化が進み、親勾玉と腹部子勾玉の段はなくなるが、一部、背面に稜を残すものがある。後述する第 1 号遺物集中①より先行する。特徴として腹部子勾玉が方形で窪む『発掘調査報告書』で B 3 類としたものは第 3 号遺物集中からしか出土していない。北大竹Ⅲ期後半からⅣ期前半頃に位置付けられる。但し、第 6 図 24 と 28 は古手の様相を示す。

第 1 号遺物集中①は第 6 図 35 を除き、扁平化している。腹部子勾玉の形状も細かく刻む A 類 (A1 類左右対称に細かい)、(A 2 類左右非対称に細かい) と B 2 類 (方形で平ら) に限定される。第 6 図 45 は須恵器甕の内部から出土し、退化が著しく終末を示す資料とみられる。周辺から出土した子持勾玉もそれに近い時期とみられ、北大竹Ⅴ期に位置付けられよう。

唯一、古手の様相を示す第 6 図 35 の解釈については後述する。

第 1 号遺物集中②は第 1 号遺物集中①とは様相が異なり、どちらかという第 2 号遺物集中の前半と後半の間に収まるように捉えられる。北大竹Ⅱ期後半からⅢ期前半頃だろうか。

## (2) 石製品

子持勾玉を除く石製品として模造品 (石製模造品) と白玉を取り上げる。

### 石製模造品

石製模造品については別稿で A 類 (勾玉形)、B 類 (剣形)、C 類 (有孔円板)、D—1 類 (斧形と推定)、D—2 類 (鋤鍬形と推定)、E 類 (不整形で祖型が不明のもの) に分類している (渡邊 2024)。

前述の通り、第2号遺物集中から出土した子持勾玉の中でも古い様相を示すものは、各部位の子持勾玉表現を含め非常に丁寧に作られている。その一方で、第2号遺物集中から出土した石製模造品の多くは、同時期の子持勾玉と比べ丁寧な作りにはない。多くは研磨され成形・整形されているが、丁寧な研磨ではなく石肌の凹凸が残るものや側面が荒割りのまま研磨されていないものも多く見られる。

それに対して、第1号遺物集中①の石製模造品と子持勾玉には類似点が多い。子持勾玉と同様に断面形が扁平形を有し、砥石による研磨で成形・整形されている。側面も研磨される。

このことから、第2号遺物集中と第1号遺物集中①において子持勾玉と石製模造品の製作に同異があることが分かる。すなわち第1号遺物集中①の方が第2号遺物集中よりも子持勾玉と石製模造品が近似しているということになる。

第1号遺物集中①から出土した石製模造品は子持勾玉と同じつくりでサイズ感も類似することから時期は北大竹V期に位置付けられよう。

しかし、他の遺物集中から出土した石製模造品は、土器や子持勾玉に頼らない年代の位置付けは困難であった。

## 白玉

白玉については篠原祐一氏による編年研究（篠原 1995）が知られるが、古墳時代全体を俯瞰したマクロな編年であるため、一つの遺跡の時期区分にはそぐわない。

型式の変遷を確認することは難しかったが、白玉の出土量は、非掲載資料も含め、第2号遺物集中で845点、第3号遺物集中で36点、第1号遺物集中①で4点、第1号遺物集中②で532点出土している。明らかに遺物集中ごとの偏りが激しく時期が下ると減少していく。

筆者は別稿で、北大竹遺跡における祭祀関連遺構から出土した遺物について、残る祭祀具と変わ

る祭祀具という視点から検討したことがある（渡邊 2024）。その際、白玉は「変わる祭祀具」の一つの事例としての「消える祭祀具」と捉えた。なぜ、時期が下ると減少するかの理由はともかくとして、現象として減少していることは確かである。ここでは遺物集中ごとの出土量が減少するという点を記しておく。

## （3）金属製品

金属製品で年代の位置付けが可能な資料として、鉄鏃と単鳳環頭大刀柄頭、鉄地金銅張三葉文楕円形杏葉、小型海獣葡萄鏡を取り上げる。

### 鉄鏃

鉄鏃はいずれの遺物集中においても大半が欠損し、不規則に点在して出土している。束ねられたような様子はない。出土量は第2号遺物集中が卓越し、第3号遺物集中や第1号遺物集中②では減少し、第1号遺物集中①ではほぼ出土していない。

時期編年は水野敏典氏の編年を参考にする（水野 2003・2023）。水野編年では後期を3段階に区分している。陶器編年との併行関係は、後期1段階（MT15・TK10 型式）から後期3段階（TK209 型式）とある。

第2号遺物集中において、鏃身部が確認できるものは、透孔がある無頸鏃が1点、三角形式が4点でそのうち1点には菱形の透孔がある。そのほかには長三角形式が7点、腸袂柳葉式2点、腸袂三角形式1点がある。それ以外は長頸三角形式が41点、長頸片刃式が10点であった。

また、関が確認できたものは、角関が3点、斜関が1点、台形関が29点、棘状関が23点である。確認できる範囲では台形関と棘状関が多い。水野氏は後期2段階に棘状関が広く普及するとしている。

第2号遺物集中出土の鉄鏃は、明確に区切ることとは難しいが後期1段階（MT15・TK10 型式）から後期3段階（TK209 型式）に収まる。

第3号遺物集中から出土した鉄鏃で鏃身部が確認できるものは三角形式、方刃式、長三角形式の3点のみであった。関が確認できたものは、台形関が1点、棘状関が9点であった。

第1号遺物集中①から出土した鉄鏃は1点のみで鏃身部は残存せず棘状関が確認できる。

第1号遺物集中②からは鏃身部が確認できるものは4点出土し、いずれも長三角形式であった。関が確認できるものは2点あり、どちらも棘状関であった。

他に第1号遺物集中一括としては4点の鉄鏃が報告されている。鏃身部が確認できるものは1点、長三角形式である。関が確認できるものは3点で1点は角関、残りは棘状関である。

第3号遺物集中及び第1号遺物集中①②のいずれも第2号遺物集中と比べて量が減少しているが、第2号遺物集中でもっとも多かった台形関が無く、棘状関を主体とすることから後期2段階以降といえる。

本稿の時期区分に当てはめると、第2号遺物集中は北大竹Ⅰ期からⅢ期、第3号遺物集中・第1号遺物集中①②は北大竹Ⅱ期以降となる。

### 単鳳環頭大刀柄頭

単鳳環頭大刀柄頭は第2号遺物集中から1点出土した。祭祀関連遺構から環頭大刀柄頭が出土した事例は、奈良県天理市の石上神宮禁足地から、明治11年(1878)に正殿幣殿新築に伴う掘削時に出土したとされているのみであり、極めて特異な出土事例である。

セット関係となる可能性がある遺物は鞘金具が出土しているが、出土地点はやや離れている。また、刀身部や鞘などの部位は出土していない。

本資料についてみるとまず、中心飾は玉を噛まない鳳凰像であり、頭頂部はやや扁平で環部にとりつかない。後頭部の角とされる部分で環部と接続する。環部には2匹の龍が表現されるが文様化が進む。背中合型か(大谷2006)。

新納泉氏による分類ではV式に位置付けられ、陶邑編年のTK209型式に平行するとされる(新納1982)。また、穴沢啄光氏・馬目順一氏の両氏は意匠の類似による型式学的な前後関係と先行型式の模倣による型式の系列という捉え方を提示している(穴沢・馬目1986)。この系列に充てると龍王山系列「翁作型」に近い。

### 鉄地金銅張三葉文楕円形杏葉

鉄地金銅張三葉文楕円形杏葉は第2号遺物集中から出土している。鉾数は残存していたもので36本、立間部分に2本の鉾が打たれている。本来は50本程度の鉾があったと推定される。中央葉文は欠損している。(第7図1)。

鉾が周縁部全体に配されており、立間部分に2本の鉾がみられることから、静岡県磐田市の甕塚古墳、大阪府高槻市の梶原D-1号墳、大阪府吹田市の新芦屋古墳の出土品に類似している。

内山敏行氏による編年(内山2013)によると後期2段階から後期3段階に位置付けられTK43型式にあたる。

馬具は他に鉄地金銅張の杏葉か鏡板の一部が出土しているが、残存状態が悪い。

### 小型海獣葡萄鏡

海獣葡萄鏡は第1号遺物集中②から出土している。外区があるタイプで、杉山洋氏の分類(杉山2003)でA類となる。

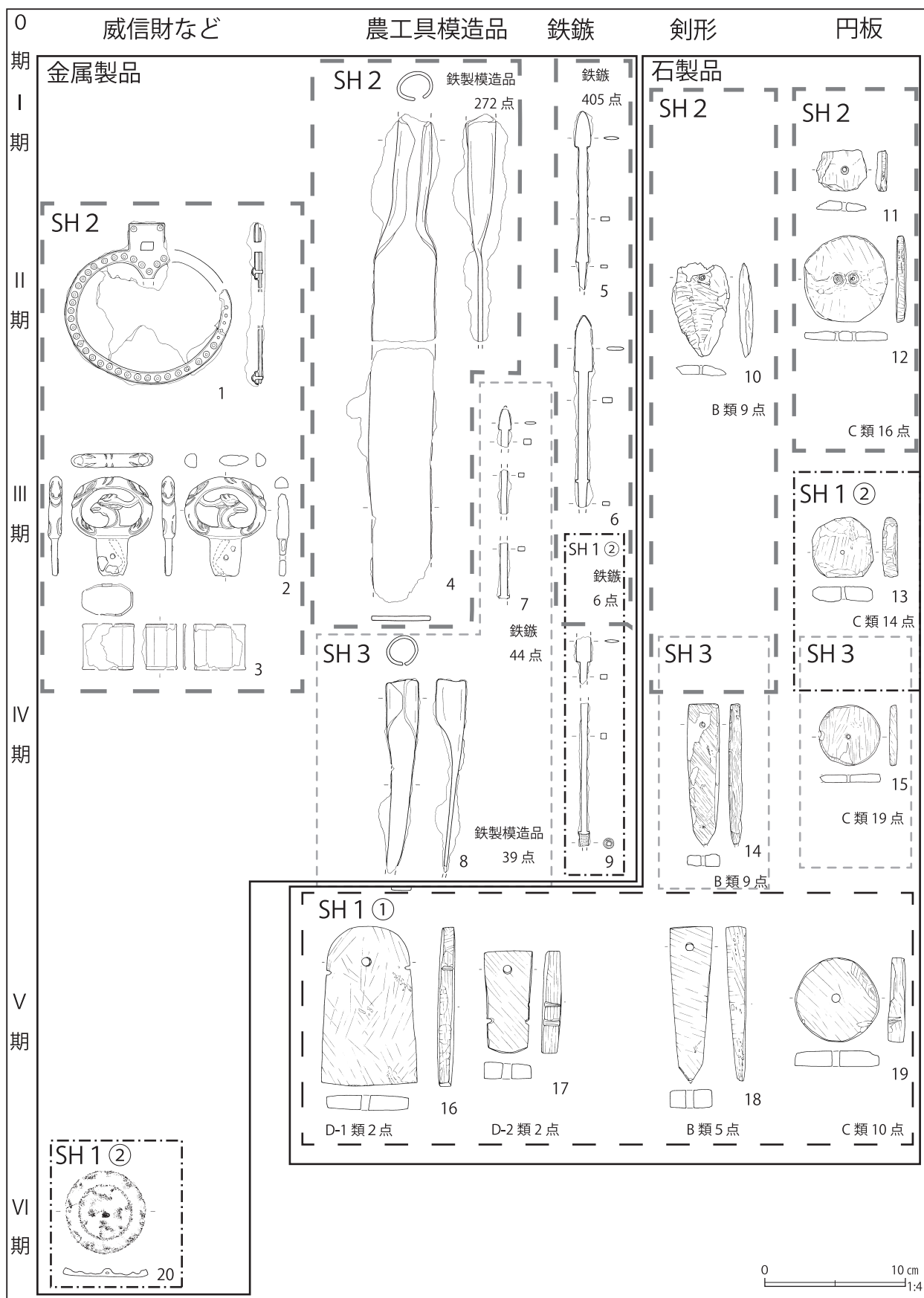
踏み返しが行われ文様は不鮮明である。踏み返しの進行具合から察するに時期は7世紀後半～8世紀前半頃の時期に位置付けられる。

### 鉄製模造品

鉄鏃に次いで出土量が多かった鉄製模造品については、類例に乏しく年代の位置付けが出来なかったが性格付けについては、別稿で検討を行っている(渡邊2024)。

鉄製模造品は第2号遺物集中からの出土量が圧倒的に多く、第3号遺物集中と第1号遺物集中②では数量が減り、第1号遺物集中①ではほぼ





第7図 石製品・金属製品変遷図

見られなくなる。

それに対して、第1号遺物集中①でのみ確認されている石製模造品にD—1類（斧形と推定）及びD—2類（鋤鍬形と推定）がある。

本遺跡から出土した鉄製模造品に類似するものの起源として、坂靖氏は朝鮮半島に由来する農具のタビ（幅の狭い鋤）のような物を想定している（坂 2005）。

農工具の模造品が、第2号遺物集中の頃は鉄製模造品を大量に用いていたものが、第1号遺物集中①の段階には金属製から石製へ転換しつつ、点数を減らして前述の通り、子持勾玉とほぼ同じ製作技法で大きさも同様の石製模造品に転換し、子持勾玉並みに重視するようになり、数も減少した可能性を想定した。

最後に、今回の検討対象に取り上げられなかった鉄鉾と石突については今後の課題としたい。

## 4 遺物集中の時期と性格

### （1）遺物集中の年代幅

第1表は各遺物集中における器種ごとの時期と増減を視覚的に示した表である。

ここからうかがえる傾向としては、第2号遺物集中の須恵器は北大竹Ⅰ期～北大竹Ⅲ期にかけての出土が認められ、Ⅱ期にまとまった出土がみられる。しかし、唯一第5図74の有蓋短頸壺は7世紀後半～8世紀代に位置付けられ、北大竹Ⅵ期となり異彩を放つ。土師器坏の傾向は北大竹Ⅰ期から出現する可能性があり、Ⅰ期からⅡ期にかけて増加し、ピークはⅡ期になる。その後、Ⅲ期になると減少しつつⅣ期に少量となり終了する。子持勾玉は、北大竹Ⅰ期～Ⅱ期を中心とした時期と北大竹Ⅲ期を中心とする時期の2時期に分かれるとみられる。中心は北大竹Ⅱ期・Ⅲ期だが、出土遺物の幅としては、Ⅴ期を除いた遺物が出土しておりかなり広い。

第3号遺物集中は大半が北大竹Ⅳ期だが、や

や古手の様相を示す須恵器が含まれる。しかし、第2号遺物集中及び第1号遺物集中②と比べ、時期が異なる遺物量は多くない。時期幅はさほど広くない。

第1号遺物集中①から出土した土器の大半は北大竹Ⅴ期に帰属する。また、子持勾玉も背面や側面の子勾玉表現が廃されるも分厚い子持勾玉や退化傾向が進んだ薄い子持勾玉がみられる。これらのことから、確認された祭祀関連遺構のなかでは最新段階の様相を示す時期を主体とすることは確かである。この時期が主体だが、一方で第1号遺物集中①出土の遺物は第5図34の甕及びその内部から出土した第5図35子持勾玉の形状が周辺から出土している子持勾玉と比べ古い様相を示す。

第1号遺物集中②は、須恵器は北大竹Ⅱ期・Ⅲ期とⅤ期のものがあり、時期幅があるが、土師器は大半が北大竹Ⅳ期に位置付けられるが、一部、Ⅲ期に上がるものも含まれる。子持勾玉はⅡ期後半頃になる。再三、述べている通り、Ⅵ期の小型海獣葡萄鏡が出土している。時期幅はかなり広い。

以上、遺物集中の時期幅を再確認したが、第2号遺物集中及び第1号遺物集中②出土の遺物には幅広い時期差が認められることを確認した。

### （2）遺物集中の性格（予察）

遺物集中の性格についての本格的な検討は別稿に譲るとして、ここでは時期幅の確認を行ったことで想定できる見通しを立てる。

第1号遺物集中①の特筆すべき特徴として並べられた須恵器甕（第4図）があり、確認されただけで9個体の甕が並べられていた。

そのなかで、周辺の遺物と比べ明らかに古い様相の遺物がある。第6図35の子持勾玉である。この子持勾玉は須恵器甕の中に納められており、祭祀行為の復元検討する上でも重要である。この場所で長い期間に渡り、須恵器甕を並べ祭祀行為に用いていた可能性がある。また、それぞれの甕

第 1 表 遺物集中の遺物出土推移

	第 2 号 遺 物 集 中						第 3 号 遺 物 集 中						第 1 号 遺 物 集 中 ①						第 1 号 遺 物 集 中 ②					
	須恵器		土 師		石 製 品		金 属 製 品		須恵器		土 師		石 製 品		金 属 製 品		須恵器		土 師		石 製 品		金 属 製 品	
	甕	その他	子持勾玉	模造品	白 玉	鉄 模造品	威 信 財		甕	その他	子持勾玉	模造品	白 玉	鉄 模造品	威 信 財		甕	その他	子持勾玉	模造品	白 玉	鉄 模造品	威 信 財	
北大竹 0 期																								
北大竹 I 期																								
北大竹 II 期																								
北大竹 III 期																								
北大竹 IV 期																								
北大竹 V 期																								
北大竹 VI 期																								

の破損具合に違いが認められることも廃棄段階やそれぞれの甕が使用された順番を検討することが可能と考えられる。今後の課題としたい。

対して、第 1 号遺物集中②は一見、規則性がなさそうという点、遺物の時期幅が広い点から、第 2 号遺物集中との共通点がみられ、同様の性格を有した場所であった可能性を想定できる。仮に 7 世紀中葉以降も継続して大量の遺物を用いた祭祀が執り行われていたら、第 1 号遺物集中②も第 2 号遺物集中並みに大量の遺物が集められていた可能性があっただろう。小型海獣葡萄鏡の存在

もその可能性を示唆しているといえよう。

## おわりに

以上、北大竹遺跡第 18 次調査において確認された 4 カ所の祭祀関連遺構それぞれの遺物時期についての検討を行った。

各遺物集中出土の遺物の時期を再確認し、まとめたことで本稿の目的は果たした。今後は、この成果を元に北大竹遺跡において執り行われた祭祀の性格についての検討を行いたい。

## 註

- 1 他に略号として「SH」という表現を用いている。
- 2 発掘調査時に点上げせず、「第 1 号遺物集中一括」として取り上げた金属製品が鉄鏃 17 点、鉾 2 点、鉄刀 2 点、刀子 2 点、模造品 18 点、不明金属製品 26 点ある。発掘調査担当者としての所見では、ほぼ全て第 1 号遺物集中②地点から出土していると記憶しているが、証拠がないのでここでは分析の根拠から除外する。
- 3 東海地方の東山窯跡の製品は陶邑窯跡に近い製作の技法である。
- 4 第 2 号遺物集中の土師器坏については、個体ごとに時期区分し、時期ごとの量の推移を示すことも試みたが、規格品ではない土師器は個体ごとの誤差も大きく、いずれかの判断がつけられない土器も多数

あり、筆者の観察眼で一点ずつに時期を付与することはできなかった。本来は一括の遺構から出土した土器群の組成も含め時期を判断するべきであるが、第 2 号遺物集中の時期変遷を絞り込むという目的から全体の組成では最初期から最終期までの全体的な時期しか見出せない。そこで土師器坏に関してはおおまかな流れを掴むことを目的とする。

- 5 小針「系」の妥当性については検討の余地があるが、本論の主題ではないのでこの点については、別稿で検討したい。
- 6 第 5 図 73 の須恵器甕は『発掘調査報告書』では頸部の文様が東海系の特徴の一つである列点文ではなく 4 段波状文である点や他の甕の胎土との比較から北関東系と推定したがアテ具痕が無文であることを付記しておく。

7 『発掘調査報告書』の「調査のまとめ」と若干の変更点がある。具体的には第6図1の子持勾玉は背面子勾玉が表現されるが、側面子勾玉表現は認めら

れない。2, 3の側面に子勾玉を表現するタイプと4, 5, 6の刻みで背面子勾玉を表現しているタイプの中間に位置付ける。

※ 図版出典は全て埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2022『北大竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第477集から引用し、筆者が改変した。

## 引用・参考文献

- 大沢味光・馬目順一 1986 「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原村愛宕山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて—」『福島考古』第27号 pp.1～22
- 内山敏行 2013 「馬具」一瀬和夫・福永伸弥・北條芳陸編『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 pp.125～135
- 大谷晃二 2006 「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同研究成果報告書』pp.145～164
- 熊谷晋祐 2017 「小針型環の成立と展開に関する一考察」『Archaeo-Clio』第14号 pp.37～54
- 後藤健一 2015 「出土須恵器の分類と編年」『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房 pp.59～167
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2000 『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第245集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2022 『北大竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第477集
- 篠原祐一 1995 「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.17～49
- 杉山 洋 2003 『唐式鏡の研究—飛鳥・奈良時代金属器生産の諸問題—』鶴山堂
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築— 第5分冊 補遺・論考編』第1回東海土器研究会資料 pp.141～170
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土器器生産と集落への供給—有段口縁杯の展開と在地社会の動態—」『埼玉考古学論集—設立10周年論文集—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.635～665
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 鶴間正昭 2019 「関東出土の東海産須恵器」『律令国家形成期の土器様相』六一書房 pp.351～389
- 奈良文化財研究所編 2017 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ』奈良文化財研究所第94冊
- 新納 泉 1982 「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110～141
- 坂 靖 2005 「小型鉄製農工具の系譜—ミニチュア農工具再考—」『考古学論攷』第28冊 榎原考古学研究所 紀要 pp.1～64
- 藤野一之 2019a 「北関東型須恵器の成立と展開」『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房 pp.58～79
- 藤野一之 2019b 「群馬県・埼玉県出土の東山窯産須恵器」『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房 pp.147～162
- 水口由紀子 1989 「いわゆる‘比企型杯’の再検討」『東京考古』第7号 pp.119～138
- 水野敏典 2003 「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『第8回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム後期古墳の諸段階 発表資料集』pp.29～41
- 水野敏典 2023 「古墳時代後期の鉄鏃編年」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ—交差編年の手がかり—』中国四国前方後円墳研究会 pp.147～158
- 山田琴子 2021 「小針型環と埼玉古墳群」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第14号 pp.15～26
- 渡邊理伊知 2022 「さきたまの地に眠る一大祭祀遺跡 北大竹遺跡」『季刊考古学』第161号 雄山閣 pp.101～104
- 渡邊理伊知 2023a 「子持勾玉からみるモノの継承と分布—埼玉県行田市北大竹遺跡の事例から—」『モノの継承と転換は何を意味するのか—分布圏を考える—』考古学研究会第69回総会・研究集会 講演・研究報告発表資料集 pp.13～22
- 渡邊理伊知 2023b 「北大竹遺跡」文化庁編『発掘された日本列島 2023 調査研究最前線』共同通信社 pp.37～39
- 渡邊理伊知 2024 「残る祭祀具と変わる祭祀具—埼玉県行田市北大竹遺跡を中心に—」『考古学論究』第23号